2015年(平成27年)2月27日(金曜日)　讀賣新聞

木造仮設小屋で地域再生

来月から販売事業

石巻で無人展示場

山形県最上町在住で、石巻市などで被災者に木造の多目的仮設小屋を無償で提供している山口スティーブさん(55)が、小屋の販売事業を3月から始める。同市湊に小屋の展示場を設け、1日にオープニングセレモニーを開催する山口さんは「地域の再生を後押しする場を作り続けたい」と協力を求めている。

山形在住の山口さん

UBCの展示場を披露する山口さん(石巻市湊で)

米国出身の山口さんは日本人と結婚し、妻の実家がある最上町で暮らしている。観光業を営んでおり、震災後はボランティアツアーを企画。全国から参加者を募り、被災した海岸の清掃や養殖業の手伝いを石巻市などで行ってきた。

被災地を回るなか、「仮設住宅に集会所がない」「漁師の小屋が流され、作業拠点がなくなった」といった地元住民の声を聞いた。建設業の経験もあったことから、企業やNPOなどからの寄付金で仮設の小屋を建てる「仮設村プロジェクト」を2011年9月に発案。山形市内の木造建築設計事務所に依頼して、開発を無償で担ってもらった。

小屋は1棟6畳の広さが基本で、山口さんの会社敷地内で板を加工し、現地に運んで組み立てる方式。壁を取り払うことで連結することもできる。

これを「ユニバーサル・ビルディング・キューブ」(UBC)と名付けた山口さんは、集まった計約4000万円の寄付金で、石巻市や東松島市などの被災者らに67棟を寄贈。建設は住民たちと一緒に行い、石巻市竹浜の漁師武田嘉(このむ)さん(68)は「集会所として利用し、地域交流の再開につながっている」と喜ぶ。

震災から4年を迎えるなか、「住民の要望はあるものの、寄付が鈍り始めた」と山口さん。「これからは自分の足で全国各地を営業に回りながら、寄付に加え、買える人には買ってもらおう」と決めた。昨年12月に市内の空き地を借り、誰でも見学できるUBCの無人展示場の整備を始めた。

小屋は1棟52万8000円(税別)。展示場で行われる1日のセレモニーは正午からで、被災者らを招待し、山形県新庄市からブルースバンドを呼んだり、石巻の海産物や山形の牛肉などのバーベキューを行ったりする。参加無料で、山口さんは「UBCに興味がある人は誰でも来てほしい」と呼びかけている。

UBCの購入や寄付などの詳細は同プロジェクトのホームページ(http://www.kasetsumura.com)。